

福嶋の子供たち

良く親の働く姿を見て従順であるが、「努力家の子供たち」は福嶋の子であった。

福嶋には「めとにされる」のは大人も子供にも共通した禁句であったと思う。

「めとにする」「めとにされる」は「目処」。即ち「目指すところ」「目当て」の意味と考えられるし、「めぐり合わせの悪い時」か「ついていないとき」の「めと」を意味するのかもしれない。

要するに「悪い意味のめとにされぬように、頑張る」のが福嶋の少年少女であったと断言できる。

しかし反面、消極的の誇りを免れない面もあるかもしれない。

下の写真は「どんこ」や「がめ」を着て、妹や弟の子守をしながら、田んぼ、または機場からの母の帰りを待っている、子供たちの真摯な「子守姿」である。

特に母親が機場に勤めていると、母親は帰ってきてから、夕飯の用意をするので、広場の子供たちは中々呼び出して貰えない。

子供の時代には「おやけ」（金持ち）の家は、早く呼びに来るが、野良仕事や機場から、上がってようやく晩御飯の仕度をする家は、なかなか呼びに来て貰えない。

一人去り、二人去りする広場に残された「ねんね守」は、どれだけ心細かったろう、其の時分になると、蝙蝠が空を覆うほど飛ぶのであった。

いつもお腹を空かしている、子供たちは、飴やキャラメルは滅多にお目にかかれない、何軒かのお菓子屋はあったけれど、キャラメルやお菓子は滅多に貰えない。

「なんか、くれ」は、お八つが欲しい時に母にねだる言葉であるが、もらえるものは、薩摩芋の時期にはあけても、暮れても薩摩芋ばかり、蟹が採れる時期には、蟹一匹そのままを貰って食べた事もある。

左のような飴やキャラメルは遠足の時、大きな飴玉は「日中玉」と言って豪華版であった。

